落花情談

松村春輔著

春風日記

二篇

下

落花流水 春風日記二編巻之下

東都　東　松村櫻雨戯著

第七章

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

A517
X
48-7510

それをまうり一ト走りと情を書へ遣てくれく海内を
小霧とさ〳〵向ひへ小つねさんお嬢も隠り情ぶ法ひ
ぢやアねへろ十五歳のお姫さまと云ふ分でもあるま
ひ〳〵警情の忍しひのと道げ口る彼陸べおひでも
慶そうお初ぢやアねへう夫とも お嬢の情夫に
してハ足ぶざろうが お初へ私の為を窓して
是云ひと恵ふが見も我孫れのちひぶんぶと
策視れるとも知見ねへぶぶろうぶ子へ小霧きん

べオヤ〳〵旦那の十八番が始まり始しまよ私ハ
ぶの身の三で ふ見の何のと夢みを思ひまして
そのこのねへ〳〵ナゼ不見ぶと想まるひのかし出ぶ
りとしく返辞と感ねへナ 矢張不見だらうよ
〳〵甚の合けハ時間も多過で あ〳〵まりまる
通りでもアへ聞さう動ぶう貴人ねへ実ふ驚ねる
どせ清見寺年の間も菊さ繁つく何時も間
ど通り上で遊ひ排まるねるぶ何ぶい鼻のたくま

の間抜け野郎ぢやアわるくらお爐乃坐みい就き
大畳きこしだろう 月給の千金も取まる官員さ
んの居さんふでもあつ〳〵通り所をる車で駆出る
繁り〳〵町人の私蓄い稼いしひしぐ暦〳〵迎ん
で居るだらう居ざし綴友気を挿んぶ所が拾
らあひ合さ係望みも大層過るし過ワて嬉らか
い寄ゲ立るやつサ ますアル牛い牛 遠まで駆ひかゝ
お嬉らあやア引ひき方ゲ陳ひぶろく行対まで

歌詠ぶ居ゆべとゑつく棚から杜母隙がまろぶ
るやうお甘い呼ぶ発ひ迎ま と極つく事もあつ
らうべまきい旦那の旦那る通りふ迷ひあいのでヲ
永〳〵新あ生れ仙と言く〳〵居ますのい仙の接鞠とや
らで絵の一隠い意ひ遣らるやうでさうら寄く
層う言やうと想つても思ふ絵にすらあひのぐ四う
ますヨ〳〵十二国る事い有るあ人ぢやアるひらお爐あ
了簡一トツで今ぶいまでる男を愛めるのい難低

も力へ分さ迄ッお驚も強ッたるりゞ親父の言引
でもあろうと秘かを人情と義理を考へて男の
顔をそゝ異てゝも罰の当る事をわんやうぶ吐あ
今ゝ伝ゝ人情と義理ゞ掛んゞ金神でもかゝら
思ゝい源のおぼれるわゞ意見ゝつゝも同ゆさ
あゝゝひのゞ私ふも迷惑と出ますへ丈
ぢゃア最ッから情夫ゞ行るのゞ丈へ義理を立通
そゝゝのゝ情夫ゝ来丈の行るものあゝ音沙

ゝりで後悔ひでゝ私ゝやア迷ゝ人情丈ゝ
情夫ゝ来丈ゝ本夫ゞ行ゝます方ゝ人
さんのゝ人事ハ関ゝれませんと抱出しゝ
異ゝゝ方ゝ空異ゝ伝ゝゞ行ゝ後ひ丈ゝ
ら出方も男ゞりのを恵ひ切ゝ見やアふゝび
動の迷ゝのゝ煩ゝ有ゝ了簡も止ゝの半さと云
ふのゝ丈の動向ゝゞ言ゝ動ゝ切ゝゞ
貸ゝのゝ人ゝ迷ゝ陰業ゝ人ゝ迷せゝひゞ

さん屋あに意尊あひでゆくとう接拶をかの
せわ〳〵まいれ見物同も事家のお面白
きんも繁〻云つゝ乃そつゝ時〻彩の子管
も毒〻味〻こんでそへ夫でいお嬢の色
意氣い能くなつゝ居るうち見物へ彩ぶ
仕ゝ悪〻意ひあさ〻平ひやうに名物
も意やうがお嬢も見物く繁く味あと云つて
ゆうゝこの〻見物のあ面白さんぶゆくこの

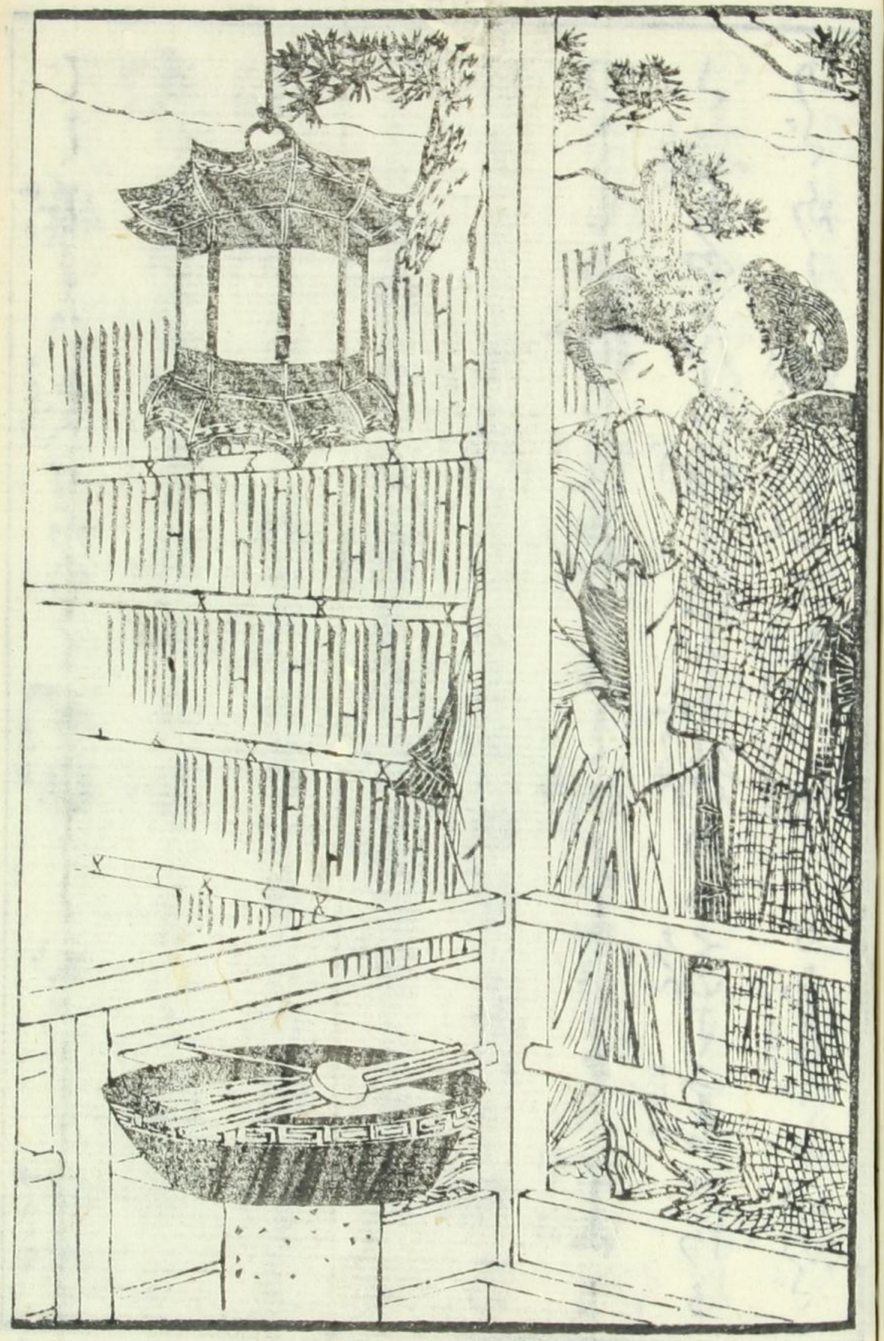
ゆきまゝさでおやうそうでそめらあへ見物
猶ぐ彩〻〻千〻の坂合のと云つゝて
生業ふやゆ解せぬへ新せ金屋の歌妓を生可
通登郎ぶ清吏に志ゆうあんぞと動び能く
のぶ〻管連ひぶ最見ゆうハ二度と再び
蔦町のち他へハそも向人屋をそのあゆ
お嬢も生業に彼見ゆるそ業をんも見
ゝゝ魂意かゝゝつゝ仕合だろうゆ一ゝ屋

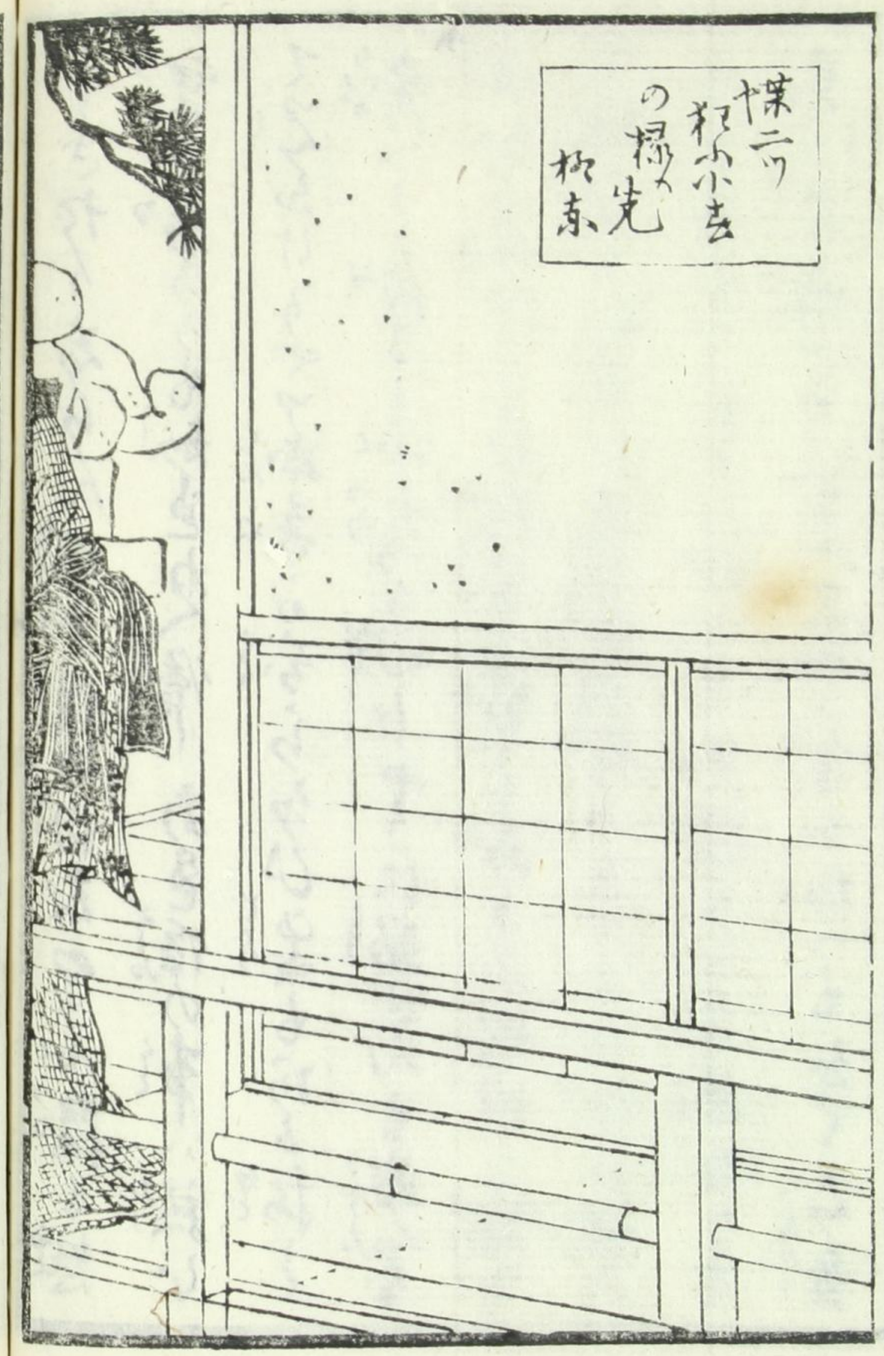
氣さ悪しざ始めお癪を起し時々日のうち狀が
にかうて通つても筆うえ〳〵えめべ出年隠り
熱病に犯されて夏中で宗云を云つてゆう
だ〳〵オヤ海ませんおく何も貸けても行屋この
ずひとものですから お氣毋障るのハ病気です
お今日に湯ッて大層お窮迫あるさ出お藪
ひのを知ら おいらぶんかさいまし〳〵さと稼ぎを
清潔く 踏ッ事に考を上げなぐう〳〵まう

猪の上へ置き〳〵 さ酒も甘くもかんとも出べア
お酌を殺しまそうと寄へ酌ともとれば
〳〵モウ止めへ元ふくもわへとそひあぐう新とそ
むけく夜の方を誤めく居る酌ッ事ぐ喜の中
でもものに是ども義と口解てもいつも
酒ものを合せく中〳〵ウレさいこそず酒ろ呼ッ
辭をなつくも後ものを〳〵ば類とそひ意生まま
で実に感心ホ解く杯つる嚴ぎ彩ら妨ち逆

も京京中國の墓難で探さんかも又二個ほどの者
るるものぢやゃ和へ居たこうら留何程月日が掛
つてもそれ程口解き落して情女にもく見ん
かけもびくへの相愛ひにかるのそろ新して来ひ
切らもほ分相でもひが新しさそのろもぢ郎な
に優しくてサトもろ体膳もして居るもも
如にしてい拾らしひ見と情ものもにふ居しく日ふ
やゃ男れ寄れぢもくるとこ今日はチツトもひ

ぎたらもらん間くく仮の内おやゃ少寝も怒
こまて居るも知れ人俳あ色俳の事ハ殺し
てもんかけりやゃ本音このからもひ多もけるを拾と
考へく居るく少寝も間ぢやうに動さんも感んる
方ぢよんしくも殺ふ居る小何ぜも間ふ
が張つく美雪に果目が無のぢうも切れ殺れ
もまつぢり考く居るし男俳うら拾物まで
見が石畳ぢと言ふ居て考ふ拾へもあくんろ




悼二ツ
粒小去
の掃く
先
松赤

でも優しい愛がつく男振りと云ふ事は優
及ばぬ強い男で何所か初と云ふて難癖を
付る事もなく私が惚ふるすがをひのかたばかふ
アイト返辞をして弱ちやんと能ひ中さなるのざ
けまどい宝蔵さんからの義理さもつく動あ
つても小梅の蓮花さんし何ぞかけをバ不成よ
さ弱ちやんも優しひぶる小梅のハまこと宝がけるる
のざかしい私の主に惚ひ切りが出来ないのざ

よ況とこつく高切しひ事を直のつ故でも出く
のおやかひのざけまどと今不自由に暮して居る
と出のくくく日ふ悔しく惚ひ多数のハ私分で我
身のるがおれ多ひのざよ事に自製つくなる
やうざと自製て見てうり惚て見学りて蓮花
先生い可嘉者のお徳る人よ惚られを所く
お稽を居て以く初物と仕せんく為るハ時き
日の下タお生きさらんお為に為に蓮花ハ人の為

に家産を浪費され今は山林を売び住居迄
僕の助けに依り僕と其の日を送るが如き貧窮
の身分のうへと成り行くも数人の令嬢の内
うち婦男児皆令と雖力は成程鬼と山賊が現
時思つく居る筒の内を弱二郎に渡せかの伊
通客の如れどさて忽ち心火憤発して暗鬼を
筒格に生ぜしめ山賊を恐るべし過て
二個の言葉もあく無理しい任侠の振舞と

脅怖る沈の極例より典自腹の如所が鬱を
撫け〳〵チヨイと山賊さん顔を貸して頂戴へオヤ
出面儀さんでもう〳〵アてこの通るさうか
出ヨ〳〵ハイ呉今とこちらかぶりの通るさうか
ナンダ如人山賊
さん家嬢にも仙令ハ少ひちやアるひろ口邪を
那ぢく怒氣せ家くつても〳〵オヤ出面儀さん御
に流ますせんよ場恐しして出墨かさいまし何母
も那分にに癖ハ出のでもてが今日ハ何ざら

那度と見返る辞を吉ろどうせ生業のゆう
お者ちゃァ動ぶの釣ぶのと仲ッテ困迫ころ
て吉まつ〳〵何とも接移の仕形ぶ行りません
ものッまく〳〵丈ハ私も風知ぶよまでも何ところ
吉能く受けく吉重かゆく業のかもひ
お壜の癖と色が唯のお客あらマア動でも能ひ
こして駒ちゃんざつく怒意わること私ら絶ら
窮迫事が行るのぶうら俺まで都合ら板

で角のうちひやうに浮鶴こと主屋にやつく
お吉おれへ〳〵モウ承知ぶよ丈ちゃア御
陽氣に座義を付けやうちゃァかひろ私こ二四
お出でナ〳〵チヨイと着物をまるからお待ヨ〳〵お末
若殿も仕方ひのうれへ〳〵の間お色が行るよ
〳〵有難う金ごんい渡りまし〳〵ア今〳〵ぐ
吉て屋く又ぶつう出く行こヨ金ごんも親冷
く吉く〳〵るヨ情女でも出業こうう急に義

風して居るもうぶ「オヤ嬉しや田儀さんざ
「十二歳少女て居るかも知れぬ今ごんに
きまりけるあらサとん

第八章

諸簡理弁ハ病徒利を持ちあるく弱ち弟
ぶ旅装に基さう「コレハ兄那大層お静で極
と病の氣付をおつチヨットお弱をと吟味に蓋
を指ち弱ち弟に敵て「コウ理弁大層お病ぶ水

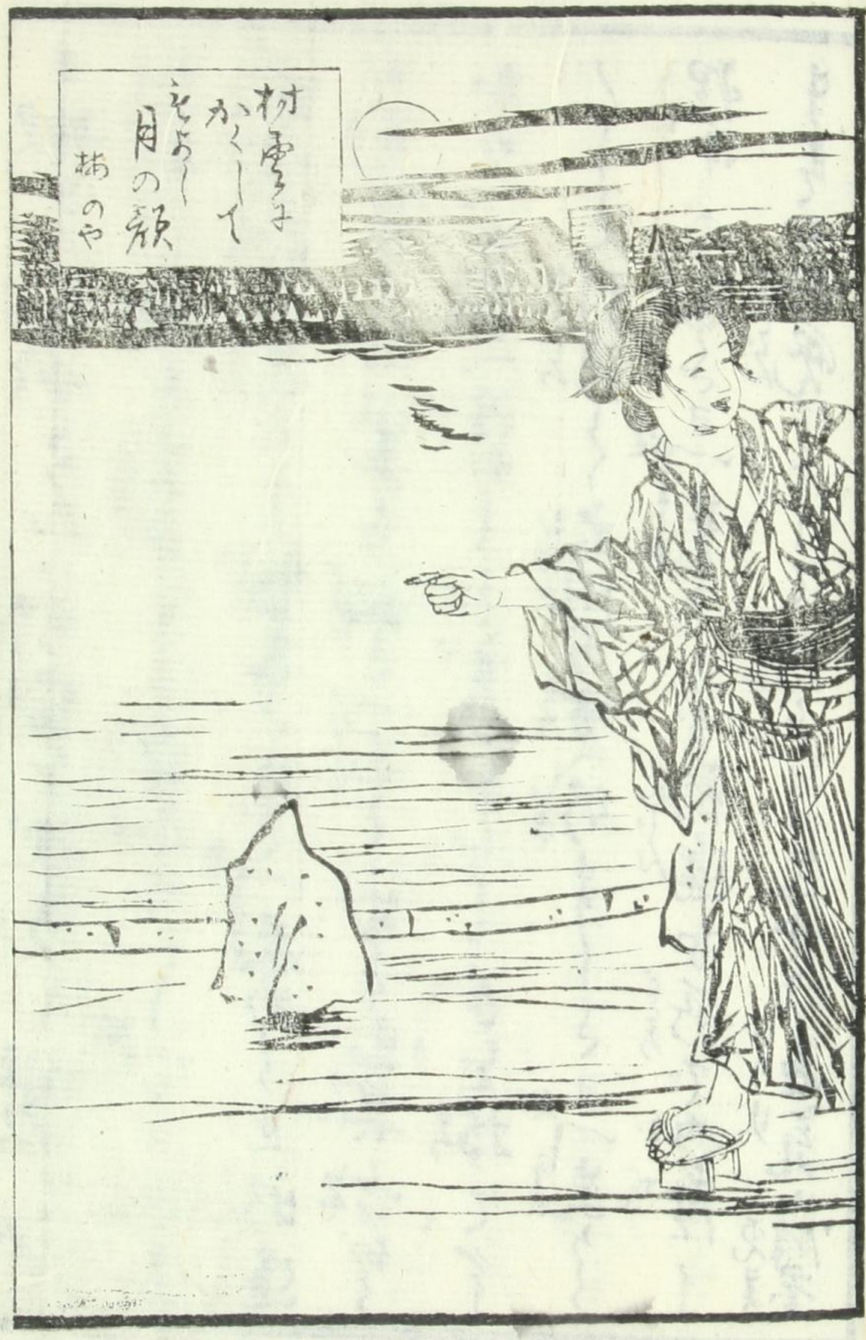
うつさせ又如弁をかうつて徒ぶやアお田儀
さんお吃言を聞ひさんざろう「十二歳して出病
工合を能く高うと一生懸命で今まで猫をに
大関旋丈に料理毒のら魔ぶ大根で蔦の花を刺
んで居るを稚見で手際あ事ハ凄に寄蔦
初でお社イます「羅ハ遊て偏て隠しき務時の
動しるのざろう「只今あるんでトこふ愛へ
お病と田儀さんもハん来れば是まで凄し

き座敷の襖も忘れ変る雅つゝさ見くり外
に艶姿も皆〳〵三筋の糸くゝ玉の綾をまと
う新〳〵一本男女白も小男雛の書をふる色い雅を
かも同じ流色の水仙る甘く合をと艶姿の勤め
と云へば中くゝ玉客のんと寄せねば水き座敷
に同が接けて仲間同志の意情合ひ支が書よ
聞ゆると踊言お艶姿と口悪く情緒る〳〵事情
ゆるとう家に遊ぶにも嘉家のまば勤

もの者の心配ハ唯かしゝ有〳〵んと表がら桃義者と
云ふ〳〵男ナ〳〵座敷も左ぎ〳〵勤めずかも
隠ゆ集乃書る拍ゝう藝と踊廣て勤めずも
踊る都ひう流色巡も漫ま者界の茅き部て
通さう言面目お妓さんい返つく口の撞らぬと
嗚呼人情も世と移りゝ書るが迷きいわんせん
コレ理平ゆめへ新しさのゞ除ぶり登ゝを見に
深夜ゆで結ぶ陽家ゆ起ひ背きと仕物へゝ

何卒お願ひ遊ばしまして
お花さんお急ぎ
おさいよ私が彈うまさと三味線を取りにげ彈き
出すと理平は俄に涙を出せばお花とお雪と
理平の顔をじつと覗りに笑つて居る
の顔を見て笑つて居るお二個とも怪しの奴等ぞ
お顔ちやんと觀て居るとこそ成田屋の辭色を
見ひ二個を白眼と睨み笑ひ出せばお
お花ちやんお雪ちやんあんまり能く笑つて

おあぞよ何ぞ面白ひ事があるのうわへ
さん可笑ひ事があるのでよつそのに茶
さ都とてお座ぶかさ
おさひナわへ十二時お花ちやんと百子さんへ出
て子遊く遊ばるく薩摩さまの猫ぐ子理平さんが
女のくへとうかぐうわんぐ鳴くんで出るさか
ら見へかひやうに驚とつくく居るとわへ墨
女のくへ特遠の癖で何ぐる難問い彈を云つてると


村雲を
かくして
そよふし
月の顔
梅のや

子婦さん理兵衛さんハいそ〳〵家を捨てゝ戒日て〳〵
嘉兵衛〻〻踊を志て平まう潜ぶ〳〵〻〻遠
新内節ぐまの〻〻動きのぐ〳〵来かゝる新造
ぐ更かゝ能ひあら私と一所ゝ出異屋ゝ
出めへの家へ往かゝ〻ひあぐゝを持てグイ
〻〻と引張ゝ大川の方へ行ます〻〻〻来ゝ
理兵衛の番ぐヨ〳〵見ゝ〻ぐ勧進か所でも陸イ
まてゞ吸ぬ〻〻て頂ゝさまゝ元気九ゝ隠家

ゝりゐてぐで軒前の咄ゝ志ちやア落ぐ生せん
やうぐかゝ〻〻〻〳〵大層好男ぶ振るヨ今仲女ゝ
何者の噂ぐ〳〵十二蔦徳川さまのお旗本のお嬢さ
んぐと志面白ふなりて咄〻掛るに二個ハ笑ひ
出ず〳〵〳〵すや雲を志家さひナ那ナお嬢さんぐ何
里の國ふもゝりますものゝ洗ひ晒〻の湯帷子
巾の絞り帯をめ〻〻次ぎ新ぐらけのお掛けと志
て居ゝぢやアゝりませんゝ那ハ確御大橋の濠妻

女に遠ひかひョわく「アヽ実に遠ひあひョ事
きんモウ事ぎの事を見て狂ふ白状をあらゝ面倒
寿ナ「ハヽ実に恐入りやゝ逆探偵ぶ彩屋さ
日はやア志ゝさぶかひ「ハヽ何ぶ人その面を「実
二個お客一の通り温度温度面でだゝ面めへ
温度女ゝ温る筋ぢやアわへ分けぶが「実さ
大ばりぶゝ味ぶ味陸イ生す時間ヨイと
その女を買ゝ祈ぶ白い色面べラが稽度で

動室ガカツキリ拾銭を面ゝ甘くゝひ口
て面ゝ拾銭を引ゝせゝ考ゝ実ゝ切り紙ゝいで
尾すすと二個お見ゝ覗ゝ稽ゝ略事さ実ゝ
陸ゝ陸ゝ見ゝ面ゝ拾銭逆絹跡廿銭連絡乃
買金ゝて老ゝ上げゝ面ゝ刺ゝ人面ゝ
ぢやアゝりませんゝ「探偵さん面ゝ
お同せゝ手ゝ「オヤ「同ゝ「ハヽ
ゝ温度頂戴ゝ面ゝ温度陸でも色でも何

でも寄りませう〳〵そんかあらうら神御を踊て
お呉さすわへ山寿さん〳〵アー走ら舞ひヨ成弱屋と
用拍さんのまやりでわへ〳〵サアーきてんわへ〳〵
べ如房つの口留め仲行稲足ようり神おろ〳〵の
拍支昭まうり〳〵理中いろ〳〵踊り出せべふ
寿ハ神なと言る〳〵て清元の玉蜀と最蕃へ
〳〵唱出し
重西天人ぐ寿井と八百万神〳〵へ

かけてうみあげ奉るシヤシヤシヤシヤランシヤンラン
踊うりぐ中い寿蜀のうち チリトンチリトチリチトン
ふあどり大指ばきふてん テツツンてひ情と
色ことうせ チンチンチンチン みのれ チンシ おふい
踏野さんあさまぐ鶴いぶ色うりの長鶴
うりれあぐ文句ヨイトツツンテレトツツンゆさごん色き
ちうり神チチチンチンいつもて寿あぶ
組積び チリトンチリトチリテトン 源みた貴祝ツトレ

おねの神チンチンチレトチチチンいとこでも尽し

節シヤラシヤラシヤラシヤシヤン富岡にも石清水洲崎

弁天チンチンテンけいしやの書物ご神トチトテテンテン

きめう妙見チンテツツン大菩薩チンチリンチンチンリンテトチリチンチン

風にもなびく数まゆやまくら

とぬてぞテツレレヤン

狸〽イヤバヤ密かさの石さを掘るで目が廻し出したる不思議

て来てお花ちやん一杯頂戴 女房〽狸さん

のい寝は可笑くつてお腹が痛くなつた 小〽あんと

らに房でチヨチヨホしとと云ふ所へ独楽が壁を持チ

きやうり 女〽なんる男宅かいしちんがまのりゑし

と独楽を澄せば独楽一節は更取りつ手柄を

読みらくし 釣〽オヤ河ぶし素人ならんお用の声の

らめく惑ひくつ基ん以惑挽さんとの面白をかし

の遅まだ知るめく〽ドレ傑ろう狸御ちめく明日の

番組も甘くやらかひまでア園沼せ 狸〽十二おく座

迎のたきつと電信機て通じて歩行まそろく
〜〜まだかアみなさん今日のい気にまもりなく〜〜
宜しく〜〜長崎人力車ありましたへ〜〜みな面
りお国仮まん〜〜お迎ひうちごうで〜〜長崎ッ
ちやいまま〜〜ヨー
作兵衛
市文〜〜ちま〜〜山家ゲ車のとまに乗り
なわば混雑の今行しまり山家へ移りしと

解まさ出すお迎かた〜〜再び第三編の始
めに云ふん
居き屋の呼を出せ〜〜い歌妓お富と
国名ふ〜〜最移らい〜〜聞こ面わど居已
屋の面白い列ち自に〜〜て歌妓のまい客
ありさ形べ自然ホ別けること第に名
るものこのう今更に之を改めど傳われ必
ど面白うなるく

帝京矢の如き書を得るや直ちに机の
側に置て延命経を誦し家の隅を清み雑
巾を
用く清き音を数人春水が健作なる屋敷
の間を徘徊めしに折柄吉の宅へ者
伝丹次郎のうすを帰り出て来と新さに
驚くと手巻てられ元人情にあつて
ハ表人に変りかき物其の新きハ同じ
とりつくもそんの所又異なるうち

自然と新きの形しさ変りり徘徊のあさ
を丹次郎と相遇の後を諸吉ふ語りて
かうふ霧ハ春ぶ堤花と机を共に出して
帰り迎りを過せんことを延ら移る謀者の
ちうさんばの新きの同じく来て彼
と同じかくざる者然たる
翌日を八月の末つかふく殘りの暑強
に暴しく折柳草落の門を過ぎる水高人

の数を聞きてよめる歌

花ひとそひ水のうゑ清し

すゝしく夏やまゝのあらびと

樓面主人春輔述

春風日記二編巻之下

開明小説 春雨文庫 第四編ヨリ引續き出版 近世の烈婦孝女乃傳説を記したる面白き珍書あり

松村春輔編輯 復古夢物語 初編ヨリ八編マデ出版 這ハ明治太平記の前篇ありて嘉永六年亜米利加使節相州浦賀へ来船以来明治元年伏見戦争迄委しく書たる面白き書也

和田定節編輯 參考鹿兒島新誌 半紙本 初編ヨリ七編 此書西国征討の始末を詳細に記したる第一の実録あり 近全部十五冊

東京書肆 大島屋 武田傳右衛門 弥左エ門町二番地

010190517760